

明治期における東京下町のある平信徒の信仰

—河上新太郎日記から—

What religious belief was possessed by a layman in the shitamachi area of Tokyo during the Meiji period : evidence from Kawakami Shintaro's dairy

文 屋 敬

Kei J. Bunya

キーワード：社会事業、社会化、教会関係資本

でもふれたいと思う。

0. はじめに

私が河上新太郎（1853-1931）によって書かれた日記（以下、新太郎日記と略す）の研究をはじめて10年以上たつ。この間、ライフ・ドキュメントを対象にした生活史によるアプローチを試みた（文屋 1998）。しかし現存する新太郎日記が1924年から1931年（1927年分は欠本）の7年分しかなく、本人から聴き取ることもできないため、他の生活史研究のようにインフォーマントの生活史を再構築することはできない。

またコンピュータによるテキスト解析を行うため、新太郎日記をコンピュータで解析できるようにテキストファイル形式として入力し（文屋 2002）、現存するすべての日記のテキストファイルを作成したが、コンピュータによるテキスト解析だけでは、書かれた内容の表面的な関係性のみを分析するにとどまり、内容を深く理解するのは難しいと思われた。

そこで本稿では日記テキストをひとつひとつ丹念に読み、内容分析を行い、他の資料と参照することによって日記に書かれた意味を明らかにしたい。特に河上新太郎の信仰がいかなるものであり、その信仰内容がどのように形成されたのかということに着目する。河上新太郎の信仰はひとつの事例に過ぎないが、その内容や形成のプロセスは当時のキリスト教信徒に一般化できる面が少なくないと考えられる。本論ではその点について

1. 新太郎日記の表記（漢字、仮名遣い）

新太郎日記で用いられている表記法、特にかな遣いは現在の我々からみれば独特である。一部を引用して紹介したい。

よきなわ寿へてのたからにまさる
まづ人けんとしていちば（変体仮名）んたいせ
ツのモノわ 志`ぶんのなまいである
このとをといモノをキよいものに
するよりほかにツとめわないの
である なにかなくとモできること
です これをはじめのわまづをヤ
にたいしてそれから友だちにたいして
ツとめる ヒゴトニたいしてよきな
人にならなければ（変体仮名）ならぬ あきない
物にしてモろをとしヤにしモのみん
にしモ寿へて志`ぶんと`りしキを
寿る人にたいしてよいなをモたな
ければ（変体仮名）なりません
（1931/1/7本文²）

ツマわみツ
子の家江
いきまし
た
（1931/1/21預記）

家そくでよる壺時まで
 は(変体仮名)なしました
 カんじ 天國人にわなにがちかうか
 よをはなれて天國のひとになれば(変体仮名)なにか
 ちかうか だい壺のそみをかいることです
 神様をそれて神のみむねにしたかうこ
 とです 人のゑキをはかることです
 神様のほをりツをまげてわなりません
 (1931/1/23本文)

新太郎日記には句読点がない。そのためここに引用した日記では、読みやすいように文章の切れ目に空白を挿入した。新太郎日記には変体仮名が使われている。また「き→キ」、「つ→ツ」、「も→モ」、「や→ヤ」、「か→カ」のようにときおりひらがなの代わりにカタカナが用いられる。さらに「し→志」、「す→寿」、「へ→江」のようにひらがなの代わりに漢字が用いられている箇所もある。こうした表記法を新太郎はどこで習得したのであろうか。

新太郎の長男丈太郎は、父新太郎を「無学文盲」(河上丈太郎 1961:10)な人と表現している、これは新太郎が識字教育を受けていなかったということの意味している。孫の民雄によれば、新太郎は識字教育を受けた息子から読み書きを習っていたそうである。丈太郎の著書には次のような記述がある。

父はキリスト教になって以来、毎晩聖書を一章ずつ読んでおりました。それが父の習慣になって、昭和六年八十歳近くで亡くなったのですが、一生涯その習慣を続けておりました。子供の時に私も父から聖書を読むように言われ、父の前で毎晩聖書を読んだことがあります。父は黙ってそれを読んでおりました。

今でも思い出すのですが、旧約聖書の多分歴代志であったと思いますが、人の名ばかり書いてある章があるので、私は父に向かって、これはもう読まないでもよいではありませんかと言ひ、次の章を読もうとすると、父は「とばさないでそこのところを読め」と私に要求したのです。そうして「聖書には無駄な文字は一つもないのだ、こんな箇所が聖書の中にあるということを知るためにも読め」というのです。

(河上丈太郎 1988:99-100)

この記述から新太郎が文字の表記法を聖書から習得し

たということが推察される。そして重要なことは、聖書に書かれた表記法を死ぬまで貫き通したということである。

ここで当時の表記法について概観してみたい。

現在我々が用いている句読点は、1881年(明治14年)頃から文学界と教育界で議論が行われ、1906年文部大臣官房図書課が『句読点法案』を発表してようやく一般に定着し始める(飛田 1992:865-887)。新太郎が読んだと考えられる明治訳聖書³には句読点はない。丈太郎を含め新太郎の周囲の人間は大正期には句読点付きの文章を書いているが、新太郎はそうした表記法の変化に対応せず、晩年に至るまで現在のような文字右下の小さな句読点をつけなかった。ただし句点に関しては、ごく一部に文章の中央に大きく「○」を記している。この表記法は明治訳聖書⁴にも見られる。例えば『マタイによる福音書』12章8節に「これ人の子ハ安息日の主たるなり○」、『マタイによる福音書』6章15節「然どもし人の罪を免さずば爾曹の父も爾曹の罪を免し給はざるべし○」などとある。

ひらがな、カタカナ、変体仮名が混在した表記法は明治期には一般的な表現であり、新聞や小説にも見られる。しかし句読点表記と同様に仮名遣いについても文学界や教育界が中心となって議論が繰り返された。1900年に小学校令と同施行規則が改正され、変体仮名の廃止、ひらがなへの仮名遣いの統一が行われた。一時、旧仮名遣いに戻った時期があるが、大正期には一部の文書を除き、ひらがな中心の仮名遣いが普及した。聖書については明治末期の改訳、大正期⁵に行われた全面的改訳によって、3つの仮名遣いが混在した表記が改められ、漢字とひらがなによる聖書が完成した。

こうした表記法の改正の動きは新太郎の周囲の人間にも影響を与え、それまでは漢字とカタカナだけで表記していた人、新太郎と同様に3つの仮名遣いを混在させていた人も漢字とひらがなだけの表記に変えた。それにもかかわらず新太郎日記は、最後まで3つの仮名遣いが混在した表記法が用いられている。新太郎が新しい表記法を知らなかったということはない。表記法が変わった友人たちからの手紙や新聞、書籍を読んでいるからである。新太郎には新しい表記法に変えられるだけの技能が不足していた、という見方ができる

が、私はそうではないと考えている。新太郎にとって最初に読んだ聖書は、文章表現に関する限り、大きな指針になっており、信念をもって表記法を変えなかったのである。

2. 新太郎日記から読み取れるライフ・ステージ

以下、新太郎日記を引用しながら新太郎自身が構成したライフ・ステージについて考えてみたい。なお、本章以降の議論では新太郎日記に書かれた内容を重視するため、現代仮名遣いバージョンの日記を引用する。

生まれて3才の時より継母にかかり、12才までの研究。
12才より大工職の研究。
16才より地上の研究。
27才より職業の研究。
36才より子供の研究。
40才よりキリスト教の研究。
79才になってはじめて人道卒業したのである。
(1931/補遺)

新太郎は自分自身で7つのライフ・ステージに分けている。それぞれのステージの内容について新太郎日記を参照しながら概観したい。

新太郎の母は新太郎が3才の時に他界した。

3才の時の研究。
私の3才の時に母に別れました。そのときの話をよく叔母より聞きました。話に、お前のお母さんはお前を守ること、自分の腫を守るより大切にしておった。永眠の時にお前を連れて行ったら、あっちに連れて行け、と言って私を呼んで、なにぶん新太郎を頼む、と言って眠りについた。その時に愛したすべての人はみんな声を上げて泣き出した。実にすべての人に良く行き届いていると思ったという話をよく叔母から聞きました。
(1931/金銭出納録)

7年間の新太郎日記の中で実母について記述された箇所は上記の部分だけである。死期が近づいて自分の過去を回顧したとき、自己の思想を形成する一つの要素として亡き実母の影響を思い出したのだと考えられる。新太郎の父伊八はすぐに「き無(きん)」と再婚

し、新太郎はき無によって育てられる。

8才の時より働き始めましたから今年で70年働きました。
(1930/2/8本文)
長年働いた力は無駄でないと感じました。10才の時に弁当運びをしたのも悪くはない。16才の時に宗のえさみの時に裸で水を浴びて神参りをしたのも悪くはない。18才で横浜へ西洋館の修行にいったのも無駄ではなかった。
(1930/1/15本文)

12才の3月に麻布十番の大工棟梁のもとに見習いとして奉公に出ることになるが、すでに8才の頃から家業の大工業の手伝いをはじめていた。

「16才の時より自分一人で働いてきました」(1930/金銭出納録)とあるように、16才の時には大工として独り立ちし、自分自身が監督として現場に立つようになる。「地上の研究」は、キリスト教徒になってからの自分の準拠すべき場を「天上」とし、それと対比した場合の表現である。

キリスト教とは何であるか。
キリスト様の教えたことを信じて行った人のことをいうのです。キリスト様は言葉でない業であります。行ったことがなければいけないのです。まずくうの話はいけませんから、わたしのしたことを見せましょう。私は16才より40才まで女道楽を指導したのです。酒に使う金、茶遊びが好きで芸者遊女も茶女もみんな嫌いになってしまいました。そういうことに使う金を人間の幸福のために使うことが喜びになってきました。40才から70才まで35年間国のために働いてきました。
(1926/3/預記表)

新太郎は、俗世間の男性、特に大工の棟梁のような立場にある男性であれば誰もが行うような、茶屋遊びや酒を飲むということを繰り返していた。こうした俗世間では当たり前だと考えられる行為を「地上」と表現し、そこに彼の行為の準拠棒を置いていた。地上での行為は新太郎がキリスト教徒になるまで続けられる。

27才からは「職業の研究」と呼ぶステージになる。新太郎は16才から大工として働いていた。彼は築地の外人住宅の建築を請け負ったのだが、暴風にあって建築中の建物が倒壊してしまった。当時の民法の規定により、引き渡し前の損害は大工の責任とされていたた

め、彼は大損害を被った（河上丈太郎 1961：5）。

この損害を機に新太郎は大工から古材木商に転業する。これが27才からの職業の研究のステージである。ただし後述するように材木商に転業した後も大工として働くことはあった。この間11才年下の「か祢(かね)」と結婚したようである⁶。

私の28才の時に築地13番館の学校600けうを歩きましたので、明治13年10月3日大嵐の時に、ちょうど建てまいをしたので倒してしまいましたので、大損をしたので請負業をやめて古材木を業にしました。

(1928/贈答品控)

36才（1889年）に長男丈太郎が誕生する。子どもは丈太郎を含めて三男五女授かることになる。次男は誕生と同時に姻戚筋にあたる青木家へ養子に出され、四女歌子は誕生後3ヶ月で亡くなってしまい、新太郎夫婦は二男四女を育てた。このように自分たちが育児に従事する期間を新太郎は「子供の研究」と呼んだ。

新太郎は自らを「無学者」と呼ぶが、子どもたちには義務教育課程である尋常小学校だけでなく、中学校、高等学校、大学に進学することをすすめる。

新太郎日記には家族の様子を記した記録がほぼ毎日のように書かれている。1926年からの日記には、「家族無事」や「家族～風邪引き」などという記述と並び、日記が記された日には毎回、「家族」という言葉が書かれる。特に病気のことや行動に関する記述がない場合も「家族」という言葉だけは書かれている。自宅で古材木商を営んでいるため、家族の様子をつかみやすかったということもあるが、それ以上に新太郎が家族のことを重視していた様子がうかがわれる。このことは次のような言葉からも理解できる。

家族はいくするより恵みはありません。すべてのことが損得はないのであります。

(1925/5/28預記)

40才（1893年）の時に新太郎は日蓮宗からキリスト教に改宗する。キリスト教徒になってからの新太郎の考え方や行為は、それまでのものとまったく異なったものへと変化した。

それまでは前述したように宵越しの金もたないと

いような金をばらまく怠惰な生活をしていたようだが、改宗後はそうした行為を一切行わず、煙草はなかなかやめられなかったようだが、酒や遊びをやめて「厳格なピューリタン」（河上丈太郎 1961：8）の生活をおくるようになる。こうして亡くなるまでの約40年間、熱心なキリスト教徒として生きた。

「79才になってはじめて人道卒業したのである」という表現には、いくつかの含意がある。一つは新太郎が78才を人生の区切りと考えていたということである。1930年8月7日、1930年10月17日の日記には次のように書かれている。

私は今年78才になりました。私の父は78才で永眠しましたから、私も今年は天国へ行くと思っています。10月17日をまっています。

(1930/8/7本文)

私は長い年月78才を10月17日は天国に帰るのであると思っていました。

(1930/10/17預記)

新太郎は父伊八の寿命と自分の寿命が同じであると信じていた。続く10月22日には次のように記される。

すべての肉体のことは何にも感じなくなりました。ただ精神のことのみを大切に思います。何ごとも神様のみむねであります。

(1930/10/22本文)

新太郎は自分の人生を78年と信じ、その後の人生は天にある人生、神と共に歩む時だと考えていたのである。

もう一つは「人道」を成し遂げた、という実感である。後述するように新太郎は自分の生活を犠牲にしても他者のために活動した。準拠すべき場は天だが活動すべき場は地上であり、神から与えられた地上での活動で、自分がなすべきことを新太郎はすべて達成したと感じた。もはや地上においてなすべきことはない。79歳になってそうした境地に達したのではないかと考えられる。こうした達成感と先に挙げた自分の寿命という考え方が「人道を卒業した」という表現に表れている。このことを端的に示すのが、亡くなる直前に書かれたと思われる次のような記述である。

私がキリスト教になって40年の間研究いたしました。
 人道としてこれ以上のものはないと信じました。
 私の喜び。
 神様を信じたこと。
 神様に救われたこと。
 神様を見ておそれたこと。
 79年の間に人と争わぬこと。
 子供が6人1つ腹のこと。
 人様の世話にならぬこと。
 人様をたいそう世話したこと。
 神様の裁きを見たこと。
 神様に御祈りをして御恵みを受けたこと。
 私の名前が子供のためになったこと、これが宝。
 創世記の本を5000冊人に配ったこと。
 箴言の本を1300冊小菅監獄のために寄付したこと。
 家庭学校を建てての監督をした。
 100日間霊南坂教会に助けに行ったこと。
 本間さんをよく泊めてあげたこと。
 日本国の社会事業に、13の会員になったこと。
 商いを人のためにしたこと。
 愛友会会員にはじめになったこと。
 労働者をすすめて会に入れたこと。
 子供のために85年間、学校の月謝を納めたこと。
 キリスト教に人を入れたこと。
 食欲に勝って体のために食べるようになったこと。
 自分が貧乏のくせに11人の人に金を貸してやって利息なしに使わせて、みんな成功した。一番遅く返した人は50円。2円貸したのに、50円もってきた。
 岡山孤児院に人をすすめて7人会員にしたこと。
 (1931/補遺)

このように新太郎のライフ・ステージを見ると、思想と行為において未信徒としての時期と信徒としての時期の二つに分けて考えることができる。キリスト教には「回心」という概念があるが、新太郎はまさに劇的な回心を体験したといえる。続く章では彼の回心体験について考えてみたい。

3. 教会への定着—回心体験

明治期に禁教令が解かれ、日本にキリスト教が本格的に布教され100年以上たった現在も総人口に対するキリスト教徒数は1%前後で推移している。一部キリスト教を「家の宗教」ととらえる信徒もいるが、大部分の日本人にとってキリスト教はいまだ外来宗教だと捉えられる。従ってキリスト教には信徒が教会に定着

するまでには、すでに日本の宗教と捉えられる仏教や神道とは異なったプロセスがある⁷⁾。

キリスト教の場合、信徒は「求道」、「入信」、「定着」という3つの段階をへて、教会に定着する。教会に定着するまでのプロセスを簡単に説明しておきたい(図1)。

未信徒は何らかの動機や契機によって教会を訪れ、礼拝に出席する。これが「求道」の段階である。この段階ですでにメンバーシップを獲得している信徒や牧師などから、キリスト教の信念体系や独自の慣習が説明される。このような信念体系や慣習を社会化させるための働きかけを、教会からの説得的コミュニケーションと捉えることができる。

求道の段階で説得的コミュニケーションを通して、信念体系や教会の慣習を受容した人は、「洗礼式」(および「信仰告白」や「堅信式」)という宗教儀礼を受けてはじめて正式な信徒としてのメンバーシップを獲得する。これが「入信」の段階である。

正式なメンバーシップを獲得した信徒は、求道段階で求められた活動以上に積極的な教会活動への参加を期待される。そして信徒としての社会化のプロセスを通して信念体系や慣習を深く内面化し、あるいは宗教体験を深め、同時に他の信徒との関係を結ぶことによって教会に「定着」するようになる。

このプロセスの中で重要な要素はそれぞれの段階へいたる「契機」と「重要な他者」、そして定着への段階へいたる際の人間関係の深まりと広がりによって形成される「教会関係資本」である。

新太郎は求道と同時に洗礼式を受けているため、求

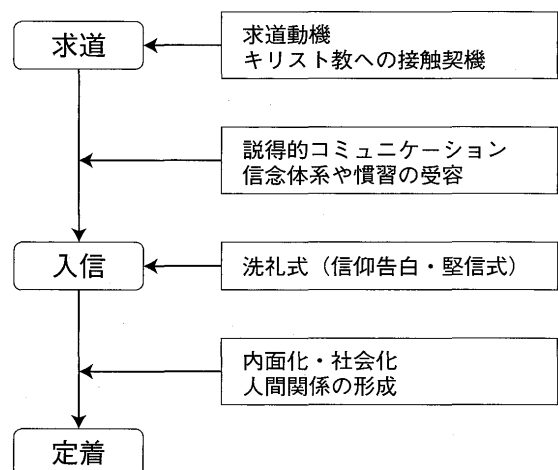


図1

道から入信への段階的なプロセスを経験していない。それほどキリスト教に対して強い確信があったと考えられるが、その原因は何なのであろう。新太郎は晩年『祈りの聴かれし物語』に小文を書いている。この小文の最初に求道と入信に関する記述がある。

私は、日蓮宗の信者であったが、四十年前に金子豊吉氏から聖書をもって、それを讀んだが、創世記に『神天地を創造たまへり』といふ一句を見て、直ちに神を認めて、基督教に改宗した。

(河上新太郎 1929：140)

近所に住む友人の金子が先にキリスト教に入信しており、彼からもらった聖書を読んで、確信を得たということである。新太郎は聖書から確信を得たと自覚しているが、求道の契機として重要な他者としての金子の存在は小さくない。

丈太郎によれば、事業に失敗した金子がキリスト教に入信し、その生活態度が一変したことを新太郎は驚異の眼をもって眺めていたと語られる(河上丈太郎 1988：99)。身近な人間の変化によって、キリスト教が人の生活態度を一変させるほどの宗教であるという認識がなされたのである。

さらに新太郎のもつ当時の社会状況への認識が求道契機に影響を与えている。新太郎は幕末に誕生したことによって、江戸幕府の崩壊、新政府の樹立という大きな社会の変革を経験した。新政府の樹立はたんに国を統治するシステムが代わったというだけでなく、国民の生活自体を変化させた。新太郎の周囲でも変化が生じていた。

日本国が75年の間に変わりましたことを数えてみますとまことにありがたい。

一番悪い？役得ということがない。第一に何十万という子もおきて、物もらいという乞食がなくなりました。山賊に海賊がなくなり、表向きで博徒の大親分がなくなりました。子供をおろす医者さんがなくなりました。キリスト教ゆるしました。議会ができました。

(1930/3/9 預記)

ここに記された内容は1930年に新太郎が感じていたことであり、また実際に乞食や山賊、海賊、墮胎をする

医者がいなくなったわけではない。しかし少なくとも新太郎は求道当時も同じように感じていたのではないかと推測できる。さらに次のような記述も見られる。

文久時代のことを考えてみると、他で教育税、じそをいうものがないから、まるで人らしい考えはない。人のためとか、国ためとかいう人は見あたらなかった。さくらお？う(五郎)が人のためにつくして磔になったといっているが、この人に対して日本全国民はそう力を入れない。さくらのお百姓さんばかりだ。ふちおらった士人が、賄賂のすけないためにけんかをして、それかえで47人腹を切った。私のような無学の者は、腹を切るよりもこんな問題の起こらぬようにしたいと思います。なにしろ切りとり強盗は武士のならないという時代であるから、家から離れるとすぐ追いはぎをやるのである。毎晩試し切りにあつて手首のない人があるけれども罪人は一人も捕まったことがない。慶応時代に私の子供の頃であった。夜になると鉄棒かついで強盗が隊を組んで家を壊して押し込み、千両箱をかついでいくような時があった。これが徳川時代の終わりであった。その頃は泥棒しない人は土百姓、一町人と言われていたのです。幸いに泥棒の中でなく、一町の中にいました。泥棒のいる牢屋に行ってみると、過失の人ばかりで本物はみんな賄賂金で出て行き、無実の素人の金なしの人ばかりです。

(1930/金銭出納録)

士族による切りとり強盗、追いはぎ、押し込み強盗などは新太郎が子供の頃には頻繁に行われていたようだが、山賊や海賊、乞食などと同様に徐々に減少していったように新太郎は受け止めていた。

こうした身近に感じられる社会の変化の中で、新太郎は新しい社会、新しい国の形成について関心が生じたと考えられる。「人のため、国ため」という表現は入信後に用いられた表現かもしれないが、自分自身が大工の棟梁として働く中で、新しい社会の中で活躍する自分の姿を想像した可能性はある。特に大工から古材木商へと転業した時期には自分を取り巻く社会状況に対して鈍感ではいられなかった。大工として働いていたような認識では、古材木商として成功することは難しい。社会状況の変化に対して適確な判断が要求される。子どもが誕生してからは、さらに社会状況に対する鋭敏な感覚が必要になる。自分の子どもをどのように育て、その子どもが社会の中でいかに活躍するか期待するようになる。

このように社会状況の変化の認識、友人金子の生活態度の変化、そして聖書に書かれた絶対的な神の創造の描写に対する驚愕を契機に、新太郎はキリスト教への求道および入信を決意する。ただ新太郎が入信した1893年（明治26年）は、歴史的に見ればキリスト教に対する反感が強くなり始めた時期であった。

明治期キリスト教の研究者の多くが指摘するように、幕末から明治初年（1880年頃）に入信した信徒の大部分は士族出身者であった（工藤 1980：78-79、隅谷 1950：73）。禁教令が解かれたとはいえ、庶民はキリスト教を邪教だとみなす傾向があり、政府の弾圧も完全にはなくならなかった。そのためキリスト教が邪教ではないという知識を得る環境にあり、政府に対して反発できるだけの階層であった士族層だけがキリスト教を受容できる状況にあった。それではキリスト教徒となった士族出身者は、なぜキリスト教を受容したのか。

神中心にどのように存在せねばならないか。そうしたキリスト教の真理性を追求するよりも倫理主義的で、いかに生きるか、しかも日本という現実国家を地盤にして自己の生を考え、いっさいを挙げて国家のために尽くそうとする倫理的支柱をキリスト教に求めている。

（海老澤 1970：169）

日本のキリスト教徒は、キリスト教によって自己なる人間を変革し、それを通じて新日本を形成することを、自己の念願とした。彼らはそのために、キリストを受け入れ信奉したのであった。そのばあい彼らは新日本の形成という自己の目的と、日本が目的とするところとは、本質的に完全に一致すると考えた。つまりキリスト教に入ることは、日本の国家の利益に反し、また西洋の宗教を信ずるがゆえに西洋人の駆使に甘んじ、主体性をもたぬものであるかのように考えられ、白い眼でみられるかもしれないが、けっしてそのようなものではなく、日本国家の独立を堅持し、日本を新しくするのだという自誇自信をいっていた

（海老澤 1970：172）

キリスト教徒となった士族出身者は、キリスト教を自己変革の倫理的支柱とし、その結果、新日本形成が達成できると確信し、キリスト教に入信した。そのためにはより多くの日本人をキリスト教に入信させる必要がある。こうして彼らは積極的にキリスト教布教活動を行った。おりしも日本は欧化主義の風潮があり、信

徒数は急激に増加した。明治5年（1872年）横浜に日本最初のプロテスタント教会（日本基督公会）が設立した後、明治6年（1873年）までに入信した日本人プロテスタント数は58名（工藤 1980：27）であった。そして明治24年（1891年）の日本人プロテスタント信徒数は32,334名（海老澤 1970：231）である。こうしてキリスト教会は急激な成長を遂げたのだが、明治22年（1889年）明治憲法の発布、明治23年（1890年）帝国議会の開設、教育勅語の発布により、国粹主義的な風潮が高まる。そして明治24年（1891年）、東京第一高等中学校における「内村鑑三不敬事件」が生じる。この事件の内容が全国に広がることによって反キリスト教的気運が高まり、キリスト教への入信者数が停滞した。次にキリスト教会が大きく成長するのは、1901年から日本の全プロテスタント教会が一致して開始した「20世紀大挙伝道」以降のことである。この際、キリスト教に入信した信徒の大部分は都市部に新たに形成された新中間層に属していた。

新太郎が入信した1893年はキリスト教会が急成長した二つの山の狭間の時期にあたる。反キリスト教の気運が高まる中、士族が中心となった教会に入信するのは強い確信と決意が要求されたと思われる。そして彼の確信と決意は入信後、様々な人との出会いによって強められることになる。

前述したように、新太郎は入信段階において、金子のように自身の生活態度を一変させる。酒、美食、茶屋遊びなどの道楽、職業の不正をいっさいやめ、人のためにつくす生活をはじめめる。同時に新太郎は東京芝バプテスト教会に所属していたにもかかわらず、教派に関係なく東京に所在するさまざまな教会の活動に精力的に参加していた。

11月2日の感じ

私は今日ご会に招きをこうもってしげように感じましたことは、この御教会の御さんのことでもあります。私が明治26年に教会に集まりましたのは、築地ふらんどさんの家でした。貧乏人に？やって集める時代でありました。わずかの間にかくのごとき、はなつなしたことは、神様に感謝せずにはおられません。考えれば考えるほど、はつてすとうに（バプテストに）御恵みがありました。

（1928/9/17-18本文）

「ふらんど」とはプリマス・プレズレン派に所属するイギリスから来日した宣教師H. G. ブランドだと考えられる。ブランドは1888年に単身来日し築地で伝道活動を行っていた。新太郎は家庭集会のようなブランドの伝道活動に参加した。そして入信してそのような集会に参加できたことに感動している。新太郎日記には入信当時、上記の教会以外のどこの教会に行ったかを明記されていない。しかしながら現存する日記には芝バプテスト教会以外の教会の礼拝や集会に出席していることが記述されている。このことからおそらく入信当時からさまざまな教会の活動に参加していたことが推測できる。

銀座教会へ (1924/6/9 預記)

四ッ谷教会 (1925/7/14 本文)

原宿の教会に行くつもりをやめました。お話をする気になれませんから (1925/7/19 本文)

原宿の教会に行く。2円クリスマス寄付をしました。50銭袋へ。 (1925/12/20 預記)

京町教会の牧師高橋さん来られ、聖霊にことについて話された。 (1926/3/30 本文)

みさきさんの洗礼につき、ツのはヅ (しのばず) の教会に行き、感話する。 (1926/6/27 本文)

信濃町教会に行き、2円寄付す。クリスマス

(1926/12/26 信書)

三崎町の教会に行き、米国の宣教師をよんでお礼を言うのです。たいそうよい集まりです。

(1928/1/15 預記)

千駄ヶ谷バプテスト教会に行き、10??円寄付。献堂式。

(1929/6/23 預記)

霊南坂教会に行く。 (1930/10/19 預記)

霊南坂教会晩餐会にて、留岡さんの薦めによって私が立ちまして、感話を述べました。留岡さんのこと、本間さんのこと、有間さんのこと、教会のことを述べました。感謝いたします。これは御恵みでありました。

(1930/10/26 本文)

日本のプロテスタント教会は、設立当初、すべての教派を網羅する超教派的な教会組織の設置を模索していた。しかしながら諸般の事情からそうした試みは失敗に終わり、超教派的な教会組織は設置されなかった (海老名 1970: 171-191)。各教派は独自の信条のもとづき、信徒に各々の生活態度や信仰を要求する。しかしながら平信徒に関する限り、教派の相違は互い

の交流に大きな障害とはならなかった。特に新太郎に関する限り、教派はキリスト教という大きな枠組みの中で捉えられ、抵抗を感じることなく、様々な教会の活動に参加している。その一つに霊南坂教会があった。

留岡は雑誌『人道198号』(大正11年2月15日)に寄せた論稿の中で次のように書いている。

私に川上⁹新太郎という30年来の信仰友だちがある。已に齢は70歳であるが、毎日朝起をして、家は芝区愛宕下町であるが、必ず其処から芝山内の樹木鬱茂たる公園内を運動してくる。喘息が氏の持病であるが、若し一度でも朝の運動を怠ると、直ぐ持病が擡頭して息が苦しくなる、併し早朝の運動を続けておれば大丈夫だと云う。

(留岡 1980: 84)

大正11年(1922年)に留岡は新太郎と30年前から友人であると書いている。1892年には新太郎は入信しておらず、留岡は空知集治監として教誨事業に従事し、東京にはいない。おそらく留岡と新太郎の出会いは、留岡が1894年から2年間のアメリカ研修から帰国し、霊南坂教会牧師に就任した後だと考えられる。留岡が「30年来」と書いているのは、4、5年の期間を長く見積もるほどに二人の親交が深かったことを示している。

さて新太郎はなぜ霊南坂教会に出向いていったのであろう。留岡と新太郎の最初の出会いを記した資料がないため、ここでは推測の域を出ない。留岡が霊南坂教会牧師に就任する前までの約3年間、教会には正式な牧師がいなかった。そのため礼拝や祈祷会の出席者はほとんどおらず、建物も朽ちていた(室田 1998: 294-295)。留岡は教会再生を期待されていたのである。同時期に家庭学校創設に寄与することになる奥江清之助が霊南坂教会に所属する。留岡の妻夏子と奥江の妻は神戸女子神学校の同窓であり(室田 1998: 403)、おそらく留岡の赴任を知った奥江夫婦が霊南坂教会に移ったのだろう。こうして奥江と留岡の親交が始まる。

奥江は内務省土木局、日本土木会社をへて、大倉組技師として働いていた人物であり、1889年にキリスト教に入信している。新太郎と同様に土木業界における談合や賄賂の横行に反対していた。彼は1908年に渡米し農場経営で成功している。奥江と新太郎はいわば同

業者であり、同じキリスト教徒であった。二人が知り合いであった可能性は高い。奥江が霊南坂教会の建物の修復や教会の建て直しの支援を新太郎に依頼した可能性は十分あると考えられる。ちなみに1931年の新太郎日記には一時帰国した奥江との交流について書かれている。留岡と同様に新太郎が死に至るまで新太郎と奥江の親交は続いた。

このようにして新太郎が霊南坂教会に出向いた可能性がある。しかし可能性はこれだけではない。丈太郎の小学生時代の同級生に小崎道雄¹⁹がいる。小崎道雄は霊南坂教会創始者の一人である小崎弘道の息子である。新太郎は丈太郎を通して霊南坂教会の窮状を知った可能性がある。キリスト教会の窮状を知った新太郎がその状況を放置することはできない。窮状を知った新太郎は教会支援のために霊南坂教会に出向いた。そこでたまたま留岡と出会い、親交が始まったという可能性もある。

いずれにせよ新太郎は霊南坂教会で留岡と出会い、その思想に共鳴した。さらに霊南坂教会には留岡から洗礼を授けられた本間俊平がいた。本間俊平は霊南坂教会の会堂を修繕する委員に抜擢されるほど、教会内で活躍しており、後に山口県秋吉台で聖者と呼ばれるほどに感化事業に尽力した人物である（室田 1998：300）。本間は山口県で活動している間もたびたび上京しているが、そのたびごとに新太郎の家に宿泊するほど、新太郎との親交は深かった。現存する新太郎日記には留岡よりも本間の名前の方が使用頻度が高い。それほど新太郎と本間は頻繁に連絡を取り合っていた。

入信後5年程度の間、新太郎は終生の信仰の友と呼べる留岡と本間に出会った。それ以外にもさまざまな教会でキリスト教徒同士の密接な人間関係を形成した。その関係は一時的なものにならず、持続された。たとえば先に引用した教会への訪問記録によれば、洗礼式や献堂式に招待されたり、感話の依頼を受けたり、所属教会以外の牧師が自宅に訪問している。これは人間関係の形成が維持され、親交が蓄積されていることを意味する。そしてそれは新太郎が教会にしっかり定着することに寄与した。

丈太郎は小学生時代に3人のキリスト教徒の友人がいたことに因縁めいたものを感じているが（河上丈太郎 1961：6-7）、キリスト教関係ではない集団の

中で3人ものキリスト教徒に出会う確率はきわめて少ないといえる²¹。その小さな確率の中で出会ったキリスト教徒と丈太郎は親交を深めた。マイノリティに属する人間は、相互に扶助しあうネットワークを形成する傾向が強い。新太郎の時代は、特にそうしたキリスト教徒同士の相互扶助ネットワークを形成する傾向があった。こうしたネットワークはある程度の規模に達すると、さらに大きなネットワークへと拡大しやすい。新太郎は様々な教会の活動に参加することによって大きなネットワークを形成したと考えられる。本稿ではこうしたキリスト教徒同士のネットワークを「教会関係資本」²²と呼ぶことにする。

教会関係資本はキリスト教会内部での立場の決定や資本をもっている信徒が教会活動への動員できる信徒数、さらに大きなネットワークへの拡大、そして何よりも教会への定着に影響する。そしてこの教会関係資本は一人の人間で終わるものではなく、家族や親族に継承される。新太郎日記の中に次のような記述がある。

私の娘より喜びの涙の手紙が来ました。嫁にいった先のおばさまが、牧師の小崎さんを信じているので、小崎さん夫婦が来られたので娘を紹介しまして、この嫁は東京の芝区の河上新太郎さんの娘ですと言って紹介したら、小崎夫婦が、その方はただくの教会の恩人であります、とおっしゃったのでおばあさんも喜びましたので、娘はうれし涙が出ました、と言って喜びの手紙が来ました。

（1930／住所人名録）

この手紙は新太郎の教会関係資本によって、娘が円滑な人間関係の形成を可能にしたことを示唆している。子どもの仕事についても新太郎の教会関係資本の影響が見られる。現在では実質上なくなってしまったが、長く多くのキリスト教主義学校では教職員をキリスト教徒に限定していた。この場合、教会関係資本が大きな人ほど就職が容易になる。

新太郎の家族は全員がキリスト教徒になっており、新太郎の教会関係資本は家族の生活に少なからず影響を与えていた。

4. 聖書にもとづく新太郎の信仰

さていよいよ新太郎の信仰について考えてみたい。
新太郎日記には新太郎自身の思想について記述する際に次のような決まった言い回しを用いる。

「望みを変えて新にせよ」

「良き名はすべての宝にまさる」

「わがわざを見よ」

「一日の苦勞は一日で足れり」

ここではこの4つの言い回しに込められた意味を読み解くことによって新太郎の信仰について明らかにしたい。

4. 1. 望みを変えて新にせよ

この言い回しはおそらく『ローマの信徒への手紙』12章2節「又この世に效ふ勿を爾曹神の全かつ善にして悦ぶべき旨を知んが為に心を化へて新にせよ」という文を言い換えたものである。この言葉は新太郎の信仰の核を形成するだけでなく、回心に基づく生活態度一変の指針となっている。少し長くなるが、新太郎自身の言葉を引用したい。

明治26年にキリスト教になりバプテスマを授けられ、そのときの財産は銀行に金700円、長屋2棟、地所60坪。商売は繁盛していました。毎日儲かるので道楽をしていましたときです。本当に気楽な時でありました。仲間の人8人できみの会を開きました。美食会8人のうまいものもちよりの会を大森の百家院で開きました。その帰りにその帰りにおいかいに遊んだものであります。そういう行いを長い間続けていましたのです。その年にキリスト教の本をもらいまして信者になりました。その時に自分の悪いことを知りました。日本人でありながら国ために少しもつとめていないことを知りました。朝から晩まで何の考えもなく、ただ自分の欲のためにのみ力をついやしていることがわかった。

人間としての罪人であることがよくわかった。それからよく自分を見ると、実にあわれのものであることがわかった。まるで望みが違っている日本国にとって害となることばかり望んでいました。国のためには信仰の正しい人にならなければならぬので、酒をやめ、女をもてあそぶことはたいへんに国のために罪である。博打は人の心をいやしくして国のためには人を怠惰にする大罪である。たばこはな

いせつの人、知恵をだす脳の力を薄くする。私の長い間行ってきたことは、人間のためにはことごとく悪いことでありましたから、すべて改めした。まことの人になることを望みました。そうなるには自分の力ではなれない。信仰をよくするには神様をよく見いだして熱心の祈りによって救われなければならぬ。そうしてキリスト様を信じる力をいただいて、救われて初めて自分の罪を捨てるのであります。ずいぶんキリストの名をかりて罪の金をほしがらる人があります。これは本当に神様の力が怖くないのです。神様をよく信じておそれるのが知恵のものであります。神様をよく信じますと、宇宙間に神様の力が満ち渡っていて御みむねにかなわぬことはすべて御裁きなされていることがはっきりと信じるのであります。人は神様のみむねによく従う人とならなければ、まことの安心はできぬのであります。さらば神様は人間に何を命じたまいますか。神様の御与えになっている良心によく従えと御命じになります。これにそむくものはすべて罰すると命じたまいました。自分の良心ばかりでなく、すべての人の良心によく従わなければならぬのである。神様のみむねと人の心と一つにならなければいけぬのであります。

神様は望みを変えてあらたにせよ、と命じなされる。

人を健康の体にしたいのである。

心を清くして苦勞のない人にしたいのである。

人と人が互いに喜んで助け合うことを望むようにしたいのである。

人は何よりも大切のことは金ではない。神様の力であることを見（い）だしてまことの信仰の人になることであります。自分の命より大切のものは信仰であるというところまで、宇宙間に神様の力が現れているのを信じてこなければ心を変えることはできません。自分の好きな物が嫌いになって、嫌いの物が好きになるのであるから、自分では直りません。ただやめているとか辛抱しているとかくらいなら、自分でおさええていることはできますが、女を見て色情出せばすでもう罪となるとキリスト様は教えてであると。ですから根本的に罪は嫌いになるのは、心をまったく作り変えていただかなければできません。

キリスト教は人を作る教えであるのです。人間としての味をもつにはキリスト様のしたことを実行しなくては人間の味はもつことはできません。人間として一番大切の心は神様をおそれる心であります。キリスト様は神様のみむねにすべて従ったのです。この心が人間のもつよい味をもっており、人間にも人間の味がなければなりません。神様をおそれる心がすべてのことに対する力であります。この力よりでたものが人間の幸福になるのであります。人の弱いところを助けるという心が人間の味であります。

(1925/戸籍表)

自分が何を「したいか」ではなく、自分が何を「すべきか」を神の意志に従って考え、行動することが「望まれている」ということ、それが新太郎が回心時に得た信仰の確信である。聖書で「心」と表現されているのを、「望み」と言い換えることによって、現時点における自分の行為だけでなく、「将来」の自分の行為をも含みもつことになる。もう1箇所引用したい。

私は40才の時に御恵みを受けまして信仰をいたすようになりましたから、ちょうど37年になります。その間というのはまるで神様の御助けによって罪を犯さぬようにまいりました。キリスト様の御言葉に、望みを変えて新たにせよ、と教えなされましたからすべて望む心が新たにになりましたから罪がよけることができます。どういう人でも望みはもっております。それを変えるので望みを捨てるのではありません。の(ぞ)みを新たにするのです。今までは人のもっている望みです。それを神様の望みになるのです。まず金を儲けるために働いたのを、人のためになるようにつくす心になるのです。今までうまいから食べるのを、まずくとも体のために食べる人になるのであります。自分のためにのみつとめていたのを、国のためにのみつとめる人になるのです。今まで飲み食いのため、女道楽につかった金を、すべてを国ために喜んでつかう人になるのです。キリスト様は、言葉ではない、我がわざを見る、と教えなされたから、すべて仕事をしなければいけぬのです。自分の力を喜んで人のためにつかうのです。それがキリストの弟子になれたのであります。ただ自分のために信仰しているのでは、それは望みを変えないのであります。私は望みを変えたのをよく目に見えるのは新島先生であります。み(な)さんのご存じの通り、23年の?年がたくさんのふちをもらっていて、けっこうの身分でいるのに、すべてを捨てて親孝行、忠義、武士道を尊んだ人です。

(1929/金銭出納録)

新太郎は、神が望まれていることは悪や罪のない、人々が安心と喜びをもって生きる国だ、と考えていた。そのために自分自身の欲を満たすのではなく、相互に他者のために努めることを望んだ。この思想は初期キリスト教徒たちの思想と一致する。そして根本的には明治政府が推進した国粹主義的な思想とも一致している。反キリスト教的な国粹主義的風潮が台頭している時代に、新太郎は躊躇することなくキリスト教に入信した。それは初期キリスト教徒の志と明治政府が目指すものとに相違を認めなかったからではないだろうか。

新太郎は「望みを変えて新にせよ」という教えに従って、それまでの生活態度を一変し、他者のため、教会のためにのみ尽力するようになった。そのことによって日本が安心と喜びのある国家になると信じたからである。日記の中で人間がもつべき望みについて次のように書かれている。

人間の精神。
 安心と喜び(を)つくること。
 政治の精神。
 すべての人に安心と喜びをもたせること。
 教育の精神。
 すべての人が教育によって安心と喜びをつくること。
 宗教の精神。
 この宇宙間にある力を信じさせること。
 会社事業をつくる精神。
 金円についての精神。
 金をつかうについてすべての人の益となること。
 すべての食物についての精神。
 すべての人の肉体のためになるようにすること。

この7つの問題をすべての人の心に信じさせて、何よりも喜びの望みにしなければならぬのです。自分の命より大切にしなければならぬのです。それはどうすればできるのか。その絵図が見たいのである。

こうした新太郎の信仰は丈太郎、さらには孫の民雄に継承され、彼らは実際に国家運営に従事するようになる。新太郎は丈太郎が国会議員になったことを誰よりも喜んでいた。それは新太郎の問いに対して丈太郎が解答を出し、実践してくれると信じていたからであろう。

キリスト教には自分の信仰が本物であるかどうかは、3代あとの孫が信徒になるかどうかで明らかにされる、と考えることがある。その意味では、新太郎の孫、曾孫が信徒になっているため、新太郎のキリスト教信仰は本物であったといえる。

4. 2. 良き名はすべての宝にまさる

この言い回しに合致する聖書の言葉はない。この言い回しに近い表現としては、『ピリピの信徒への手紙』2章9節「是故に神ハ甚だしく彼を崇めて諸の名に超る名を之に予へ給へり」があげられる。新太郎日記に

は次のように書かれている。

良き名はすべての宝にまさる。まず人間として一番大切のものは自分の名前である。この尊きものを清いものにするよりほかにつとめはないのである。何がなくともできることです。これをはじめるのはまず親に対して、それから友だちに対してつとめる。日ごとに対して良き名の人にならなければならぬ。商い物にしても労働者にしてもの民にしてもすべて自分と取引をする人に対して良い名をもたなければなりません。

(1931/1/7本文)

良き名というのは新約聖書の書簡ではキリストあるいはキリスト教徒を指すことが多い。おそらく新太郎は「良き名」という表現を、「キリストにならう」という言葉と同義に捉えている。キリストはすべての人から崇拜され、崇められる存在であったにもかかわらず、人として人のためだけに生きた。その名前は全世界の人に「善」の象徴として知られることになった。そのキリストのように人のために働くということの意味する。

また「宝」という言葉は『マタイによる福音書』19章21節「イエス彼に曰けるハ全からん事を欲はば往て爾の所有を售て貧者に施せ然れば天に於て財（たから）あらん而して来り我に従へ」から用いられている。イエスが若者に要求したように、自分の財産を貧しい人、困っている人に捧げることによって、この世で得られる富や名声といった宝にまさる宝を得ることができる。

実際、新太郎は自分たちの生活が苦しくなり、月の支払いが困難になるとわかっているにもかかわらず、人にお金を貸していた。

自分が貧乏のくせに11人の人に金を貸してやって利息なしに使わせて、みんな成功した。一番遅く返した人は50円。2円貸したのに、50円もってきた。

みんな心にとめて返さぬ人は一人もなかった。5年あとに借りたとして私の留守に100円もってきた人があった。妻は知らぬから断ったが無理においていった人がありました。家に金のないのに人に金を貸したことは妻に話ができぬので、妻は知りませんです。

(1931/補遺)

4. 3. わがわざを見よ

キリスト教の一番大切のことは、自分の望みを変えて新たになることでもあります。神様のみむねに従うことでもあります。自分の業がすべて神様のみむねにかなうようになります。キリスト様はのたまいました。我が業を見る（ろ）とおおせられました。ヨハネが弟子をキリスト様にうかがいによこしたときにキリスト様は、めしいは目をあり、貧しき人にしくをあたい、死にたる者はよみがえされと、すべてなされたことをよくのべたまいました。

キリスト教は人のためにすべての業を見せなければならぬのであります。汝らの良き行いを見せ、すべての人が神様をあがめ（る）べし。キリスト教徒の業は神様の手を動かす力がなければならぬのであります。

(1929/2/23-25本文)

「わがわざを見よ」という表現は『マタイによる福音書』11章2節—6節に書かれたエピソードから使用される。

偕ヨハ子獄にてキリストの行し業を聞その弟子二人を彼に遣して曰せけるハ来べき者ハ爾なるか又われら他に待べき乎イエス彼等に答て曰けるハ爾曹の聞ところ見ところの事をヨハ子に往て告よ瞽者ハみ跛ハあゆみ癩病人ハ潔まり襲者ハきき死たる者ハ復活され貧者ハ福音を聞せらる凡そ我ために躓かざる者ハ福なり○

『福音書』や『使徒言行録』にはイエスの弟子たちがキリストの名前によってキリストと同じような奇蹟を行ったことが記されている。そして聖書にはそうしたイエスやその弟子たちの行い（業）を見て、人々はその教えを信じたとされる。新太郎は別の場所で「聖書の研究というのは本を読むのではない。それを信じてなすのである。キリスト様は、言葉を聞け、とは言わない。我がわざを見よ、と言いたもうた。」(1929/11/10本文)と書いている。新太郎にとってキリスト教を信じるということは、それを生活態度や行動で示すということである。それは金子の生活態度の一変を見て信じた彼自身の求道体験だけではなく、留岡や本間の行いが影響している。

いくら言葉でキリスト教を信じていると言っても、行動しなければ意味がない。また口ではすばらしいことを語っていたとしても、実際に罪ある行動をしてい

では、すべての言葉が無意味なことになる。新太郎にとってキリスト教は「言葉」＝「行い」である。

4. 4. 一日の苦勞は一日で足れり

この言葉は『マタイによる福音書』6章3節に書かれた「是故に明日の事を憂慮なかれ明日ハ明日の事を思わづらへ一日の苦勞ハ一日にて足れり」である。この言葉を新太郎は文字通り将来生じるだろう苦勞を今悩んでみても仕方がない、苦勞すべきことが生じたときに苦勞すればよい、と捉える。「一日の苦勞は一日でたれり。この教えはまことであります。人は苦勞がきてから苦勞をすればいいのです。」(1926/10/2 信書)

それでは苦勞や悩みが実際に生じ、それが解決できない場合、新太郎はどのようにして解決したのか。

私は、如何なる困難なときでも、唯だ神に祈るばかりである。そして人には一度の金の相談をしたことはない。其れで此の困難な場合も切抜けて来たのである。月末に壹萬圓の支拂いがある、三千圓位しか回収できないときの祈りは必死であるが、神様は都合よく解決して下さるのである。併し乍ら、只祈るばかりでは不可ない。祈る反面に人も、十分の努力をしなくてはならない。

(河上新太郎 1929:142-143)

新太郎にとって苦勞や悩みの解決は祈りしかない。新太郎日記にはたびたび支払いができないため祈ったという記述が見られる。しかしその問題は「不思議と」解決する。そしてそのことについて神に感謝している。「祈りは不思議なほど聴かれるのである」(河上新太郎 1929:145)。

もちろん新太郎が述べるように「ただ祈る」ではなく、解決に向けて自分が十分に努力しなければならない。十分に努力をした上で、神に祈ることによってその祈りの内容が「不思議と」達成される。こうした宗教体験は新太郎の信仰を堅固なものとし、さらなる活動へと導く。

明治初年にキリスト教に入信した大部分の士族出身者は、自分たちの手で新日本形成を行うため、その倫理的支柱としてキリスト教を受け入れた。そしてその多くが教会の指導者として活動した。しかし新日本形

成について考えていたのは士族出身者だけではない。新太郎や留岡のように旧中間層に属する庶民も同じ願いをもっていた。

新太郎の信仰は旧来の自分の「望み」を捨てて神の意志を受け入れるという自己変革が核になっている。この信仰に基づき、自分の生活態度や行動を一変させ、キリストのように人のため、国のために働くことを決意する。様々な教会の活動に参加し、時には経済的・物質的な支援を行う。さらに数人の有志たちと共に路傍伝道をして、新中間層の入信を促し、同時に自分をたよってくる人に返されることを期待しないで金を貸した。キリスト教を信じて行わなければ、彼の信仰は自分自身の行動によって否定されるからである。

5. まとめ

丈太郎の妻末子は、新太郎が学校教育を受け、機会に恵まれていたら日本歴史に残る偉人になったと述べている(河上前委員長記念出版委員会 1966:28)。新太郎を知る多くの人々も同様の感想をもっていた。私も同感である。しかしたとえ機会があったとしても新太郎は偉人と感じられるような活躍をしたとは思わない。新太郎の行動の指針は「キリストにならう信仰」である。そして徹頭徹尾、他者を支援することに尽力した。歴史の表舞台で活躍する指導者ではなく、指導者を陰から支え、人々の一人一人を援助する生き方を選んだ。

留岡や本間のような社会事業は金銭的利益を生み出す生産的な活動ではない。むしろ金銭を消費する事業である。もちろん利益を生み出しながら社会事業を行うことは可能であろう。しかしながら現在の社会福祉施設の経営状態を見てもわかるように、社会事業を経営的に単独で成り立たせるのは困難である。

新太郎は日本の13の社会事情の会員になったと述べているが、社会事業は新太郎のような支援者なしには成立しない¹³。新太郎はこのことを強く意識していた。つまり新太郎のように自分で労働して収入を得ている平信徒が、社会事業やキリスト教会を経済的・物質的に支えるという意識である。日本の社会事業やキリスト教会はこのような意識をもった平信徒によって支えられてきた。

経済的・物質的な側面だけではない。社会事業に従事する人間は、自分の私的な生活時間を確保するのが難しい。現在でも社会福祉業務に従事している労働者は、昼夜問わず施設利用者や社会福祉サービスを必要としている人のために働いている。社会福祉業務に従事している人間は、それなりに使命感をもって従事し、精神的な充実感を味わう可能性はある。しかしその家族はどうか。家族は多大なる犠牲を強いられている。他者の幸福のために働くことによって、自分の家族を犠牲にしなければならない。つまり社会事業に従事している人間の家族を支えることが必要になる。

このように社会事業は経済的にも精神的にも支援する平信徒が必要だった。新太郎は社会全体の安心と喜びを望みとしていたため、たとえ指導者になる機会があったとしても、自分自身が指導者になることよりも、指導者とその家族を陰から支えことを選ぶだろう。実際、霊南坂教会を支援したときには、そのまま活動を続けければ、間違いなく教会の指導的立場に立つことになった。しかし新太郎は教会の再生を見とどけると、もはや教会の支援に現れることはなかったと言われる。

日本における明治期のキリスト教史や社会事業史では、指導者や指導的立場にあった人間のみが議論の中心になり、平信徒に目を向けられることはほとんどない。しかし初期キリスト教会や社会事業を支えたのは、無学無名の平信徒ではなかったのか。いくら優秀な指導者がいたとしてもその主張に賛同し、具体的に働く人間がいなければ、どのような活動も成立しない。指導者を支える新太郎のような平信徒が存在してはじめて、様々な活動が実を結ぶのである。

注

- 1 「変体仮名」と表記した「は」という文字は新太郎日記では変体仮名の「よ」が用いられている。変体仮名は現在の活字では用いられないため、ここでは「は(変体仮名)」と表記した。
- 2 この(1931/1/7本文)は日記の1931年1月7日付けの本文部分に記述されたテキストであることを示す。「預記」は預記部分、「送信」は送信部分、「受信」は受信部分をそれぞれ指している。なお、新太郎日記では日記にあらかじめ印刷された日付通りに記述されているわけではない。印刷された日付とは異なる日に書かれた記述がある。その場合、新太郎によって日付が挿入されている。

- 3 新太郎が愛読した聖書は1924年の関東大震災で焼失し、どの翻訳版か確定できない。
- 4 ここで参照した聖書は1904年(明治37年)に英国聖書会社によって発行された、福音印刷合資会社神戸支店によって印刷されたものである。
- 5 大正期に全面改訳された新約聖書には句読点がつけられている。
- 6 新太郎日記にも他の資料にもか称と何年に結婚したか明記されていない。ただ戸籍謄本によれば明治15年(1882年)に戸主変更が行われていることから、結婚もこの年であったと推測できる。なお、2002年に発表した研究ノートには妻の名前を「き称」としていたが、「か称」が正しい。ここに修正を記述しておきたい。
- 7 ここで展開した信徒が教会に定着するプロセスについては、拙著(1997)で議論した。その議論の中で、キリスト教を「家の宗教」と捉えていたり、親がすでにキリスト教徒であり、かつ入信に支障のない信徒を「生得的信者」、家族に信徒がなく自分がはじめてキリスト教に入信する信徒を「獲得的信者」と、信徒を二つに類型化した。新太郎はこの類型で言えば、獲得的信者であり、本論で議論するプロセスをたどっている。また、ここではキリスト教に限定してモデル化しているが、このモデルはキリスト教に限らず新宗教全般に一般化することが可能であると考えている。
- 8 どうしても判読できない文字については「?」という符号をつけている。
- 9 川上は河上をさす。新太郎自身も日記の中で自身の名前を「川上」と表記することがある。
- 10 小崎道雄は1922年に霊南坂教会の伝道師となり1931年に正教師となる。丈太郎と小崎道雄の親交は小学生時代から続けられ、丈太郎不在の時にも、新太郎のもとにも何度も訪問していた。小崎の訪問については新太郎日記に記されている。
- 11 現在においてもキリスト教の信徒数は日本の人口の1%前後であり、プロテスタントに限定すれば、そのおおよそ半分になる。一般の集団の中でキリスト教徒に出会う確率は、丈太郎の時代とあまり変わっていないだろう。
- 12 「教会関係資本」という概念は、1992年関西学院大学社会学研究科に提出した修士論文『キリスト教会の教勢と教会成長の実証的研究—信徒が教会に定着するプロセスを手がかりに』の中で、P.ブルデューの文化資本にヒントをえて構成した。
- 13 家庭学校会計報告書には募金者名と募金額が明記されている。この中には新太郎が親交を深めていた奥江の名前もある。奥江は渡米後に事業で成功しているが、そこで得た利益を家庭学校に寄付していたと思われる。

参考文献

- 海老澤有道、大内三郎、1970、『日本キリスト教史』日本基督教出版局
 海老澤有道、1981、『日本の聖書—聖書和訳の歴史』日本基督教団出版局
 河上丈太郎、1961、『私の履歴書』日本経済新聞社

- 河上前委員長記念出版委員会、1966、『河上丈太郎—十字架
委員長の人と生涯』日本社会党機関誌局
- 河上新太郎、1929、『聖書的生活』（卜部幾太郎編「祈の聴か
れし物語」）アルパ社書店
- 河上丈太郎、河上民雄編、1988、『河上丈太郎演説集—生誕
百年記念』河上民雄後援会
- 河上民雄、1993、『祖父の日記—東京下町の平信徒の生涯』「兄
弟」（417号3月号）基督教学徒兄弟団
- 工藤英一、1980、『日本キリスト教社会経済史研究』新教出
版社
- クラウス・クリッペンドルフ、三上俊治他訳、1989、『メッ
セージ分析の技法—「内容分析」への招待』勁草書房
- 須藤久士、2006、『新聞と常用漢字の歴史的考察 未完の日
本語—「世の中」と教育のはざままで』「朝日創建レポート」
（2006年9月号通巻196号）朝日新聞社総合研究本部
- 隅谷三喜男、1950『近代日本の形成とキリスト教』新教出版
社
- 隅谷三喜男、1968、『日本の社会思想—近代化とキリスト教』
東京大学出版会
- 留岡幸助、同志社大学人文科学研究所編、1980、『留岡幸助
著作集第4巻』同朋舎出版
- 飛田良文、1992、『東京語成立史の研究』東京堂出版
- 文屋 敬、1997、『宗教的社会化の理論構築のために(2)—作
業仮説構築のための実証研究』「福岡女学院短期大学紀要
第33号（一般教育・生活学）」
- 文屋 敬、1998、『宗教的社会化の理論構築のために(3)—新
太郎日記の分析をとおして』「福岡女学院短期大学紀要第
34号（一般教育・生活学）」
- 文屋 敬、2002、『新太郎日記の研究』「関西学院大学社会学
部紀要第91号」
- 室田保夫、1998、『留岡幸助の研究』不二出版